

2歳児保育における複数担任の動きに関する考察

A Study of Nursery School Teachers' Care of 2-year-olds

堀 美鈴

Misuzu Hori

関谷みのぶ

Minobu Sekiya

はじめに

乳児期は、人が人として育つ土台作りの時期であり、人への信頼、そして主体性を育む大切な時期である。本来、乳児は家庭内で家族に細やかな愛情を受けながら育つことが、一般的と言われていたが、社会の変化とともに、核家族化や女性の就労などの様々な要因によって、近年、乳児の育つ場が家庭から保育所へと動いている。現在では「待機児童」の88.6%¹⁾が0～2歳の低年齢児で、保育所への入所・利用資格があるにもかかわらず、保育所不足や、定員超過により、入所できず、入所を待っている状況である。

このように乳児保育の需要が増している中、保育所保育指針の2017年改定でも、0歳から2歳児までの低年齢児の保育の充実が求められている。低年齢児の保育は養護的側面が重視されるため、子どもの育ちに保育者の存在が多くを占めている。保育所保育指針(2017)総則で示されている「十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること」は、低年齢児の保育の中ではとても大切にしていかなければならないことである。

また、認可保育所での低年齢児の保育の場合、一つのクラスや保育室を運営していく保育者が複数で保育に関わる「複数担任制」が特徴といえる。低年齢児の保育の質を高めるためにはどのように保育所での保育をおこなっていけばよいのか、その際に必要とされる保育者の専門性とは何かについて、2歳児クラスの担任の動きを通して考える。

I 乳児保育について

乳児とは、児童福祉法上、0歳児を意味するが、本稿では、保育現場で一般的に使用されてきた0歳～2歳までを乳児とし、その保育を「乳児保育」とする。

児童福祉施設の設備及び運営に関する基準に定められている保育士の配置基準は、保育者1人に対し0歳児おおむね3人、1～2歳児6人、3歳児20人、4～5歳児30人とされている。年齢が低くなればなるほど保育者1人に対する子どもの数は少なくなる。生活時間の多くを保育所で過ごす乳児にとっては、保育者の存在は、自分を受け止めてくれる大きな存在であり、同時に、保育所保育指針(2017)にもあるように、養護的側面が重視されなければならない。

2017年の保育所保育指針改定では、これまで不十分であった乳児保育が見直され、0歳及び、1歳以上3歳未満のそれぞれの年齢区分における保育のねらいや内容について、記述の充実が図られ、その保育の質を向上させるためのポイントが書かれている。乳児保育に対してより専門性が求められてきたともいえる。改定後、年齢により配慮事項は区別されて記載されているが、いずれも一人一人の状態にあった保育を行うことや、特定の保育者(担任)の存在の重要性についての記載がみられる。保育所における保育は、家庭における保護者と子どもの1対1のかかわりとは異なり、集団の中で保育者が保育をするため、個々に丁寧に関わっていくことが必要とされている。

II 目的

乳児を育てる保護者にとって、子どもにいかん基本

的生活習慣を身に付けさせるかは、保護者の生活の中の大きなウエイトを占める。家庭で保護者は、毎日の生活における排泄、着脱、食事、清潔など、ほぼ1対1で、子どもにやってあげながら、手助けしながら、時には見本を見せながら、子どもが自らの力で自分の身の周りのことができるようにしていく。一方で、乳児保育は家庭とは異なり、集団で過ごす中で、個々に生活習慣を身に付けさせていく。

本稿では、1日の保育の中で、当たり前の日常である、子どもが生活習慣を身に付けていく場面をとらえた。この場面は保育室にいる複数の保育者が個々の子どもに関わる「必ず行われる活動」である。2歳児の日常保育の中で、複数の保育者はどのようにかわりながら、保育を行っているのかについて、保育者の動きを分析し、2歳児担当保育者の専門性について探る。

Ⅲ 方法

日常の保育の一部をビデオに撮り、ビデオの音声や画面より、保育者の発言や動作を書き起こし、その中から保育者同士のかかわりや子どもへの対応を分析した。書き起こした内容について筆者ら2名で確認を行った。

本研究に使用したビデオは、2017年5月30日10:00から10:20までのA保育園2歳児保育室及び、保育室から玄関へと続く廊下における2歳児17名(男児10名、女児7名)と保育者3名の様子を撮影したものである。保育者3名の属性は、保育者A；女性60歳、子ども2人孫有、保育者経験年数22年、保育者B；女性58歳、子ども3人孫有、保育者経験年数18年、保育者C；女性24歳、子どもなし、保育者経験年数2年である。

保育者Cがクラスの主担当を担っており、主担当の役割は、子どもを集団として束ねていくことである。

Ⅳ 倫理的配慮

録画したビデオについては、研究協力者と研究協力園に事前に内容の確認を行ったうえで、研究に使用することを説明した。あわせて、研究協力者及び研究協力園には、個人が特定されることのないよう配慮すること、また、得られた情報に関して、研究者が責任を持って管理することを口頭にて約束した。

Ⅴ 事例の内容

1. 子どもの生活

主な子どもの生活の流れは、以下の通りである。

- ①ズボン・パンツ（おむつ）を脱いで排泄に行く
- ②ズボン・パンツ（おむつ）をはく
- ③手を洗う ④消毒をする ⑤帽子をかぶる
- ⑥玄関に移動する ⑦靴を履く

2. 保育者の動き

(1) 0～3分

1) 保育者の支援の実態

保育者A 保育室のトイレ横で、子どもたち一人一人の着脱を援助し、手の消毒をする。

保育者B トイレの中で、子どもたちが排泄をする援助を行う。

保育者C 保育室で排泄が終わった子どもから、順次帽子をかぶる援助を行い、子どもたちが座って待てるように援助する。

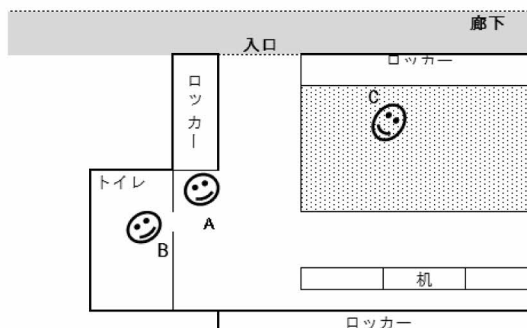


図1 保育者の向き_1

2) 結果と考察

ア 3人の保育者が、ほぼ全員を見渡せる位置にいる着替えを担当している保育者Aは、おやつを食べている子どもを目で追いながら、保育者Bと連絡を取り、子どもに声をかけながら、排泄から、手洗いができているか確認し、最後の消毒スプレーを行っている。トイレの中にいる保育者Bは、便座の横にしながら、子どもたちに声をかけ、トイレ前にいる保育者Aと連絡を取り、着脱している子どもたちの様子も見ています。保育の主になる保育者Cは、ロッカーを背にして、個々の帽子が入った箱の前に座り、笑顔で子どもたちの様子を見ています。

保育者AとBは、子どもに声掛けしながら動いている。しかし、主になる保育者Cはほとんど動かず、笑顔で子どもたちを見守っている。動かない保育者が、同じ場所で子どもたちを見守っているということは、子どもに安心感を与え、そのため子どもが落ち着いて

表1 保育者の支援の様子__1

	保育者A	保育者B	保育者C
	トイレの前で座り、それぞれのおむつ等を用意し着脱の補助	トイレの中で排泄の補助	ロッカーを背にしてカーベツに座り、帽子が並んだ箱(帽子入れ)を前におき、帽子をかぶる補助
時間	子ども:トイレの中、外(排泄)16人、おやつを食べている1人		
0分	Aくん、手洗ってきて	出た	
	○ちゃんおいで		○ちゃん消毒してもらった?
	(着替えさせた子に) ○ちゃん、出ちゃった。出てよかったねえ。		(立って)消毒借ります
	○くん、はきますよ。○くん	○ちゃん出ました	どうぞ
	○くん、外に行くからおしっこしてこよう		A君消毒します
	○ちゃん手洗った?。ちゃんと手洗った?		
		かーわって	
	手、洗ってきて		○くん、どこだ
	○くん、○くん、どうぞ		どれだっけ?
	○くん、洗った		
	はきますよ	出た、出た	
	します		↓
	します		Aくん帽子取りにおいて
		○さん、パンツはいて	こっちとこっち、わかる?
	Bくんおしっこ行ってね	Bくんくーんおしっこ来てね	半分して、そうそうゴムして
	こっちこっち○くん		ゴム下持って行って
	○ちゃんおしっこ出なかったですか?	○ちゃん出ました	
	○ちゃんは?	○ちゃん出なかったです	○ちゃんゴムどこへ行った?
	Bくんおしっこしてきてね		○くん
	○くんこれはかなきゃ	○くん出ます	○くん
	○くん手洗った?	パンツはいてきて	
	Bくんおしっこ行ってきて		座って待てね
	○ちゃん行きます		○ちゃんおいでね
		パンツはいてきて	
		ちょっと待って	
	トイレ行ってきて	Cくん行きます	帽子どーこだ
		さあだれが/パンツはけるかな?	
	出来た?手洗えた?		Cくんおいでね
	手洗ってきてください	おてて洗っておいで	
			待てね
	出た	○くんこっち	
	○ちゃん出た?	○ちゃん出てなかった	
			(こどもが壁にぶつかって音がした)
	どうした?	大丈夫?	あ びっくりした
		○くんこっちだよ	
3分	○ちゃん濡れてなかった?		

【注】

- ・()内の言葉は、保育者の言葉ではなく、保育者の動きや保育室での状況を説明するために筆者が付け加えたものである。
- ・子どもは、Aくんのように、排泄後、消毒を行い、帽子をかぶって、保育者Cがいるスペースで待つという流れとなっている。
- ・保育者間で何度も同じ子どもに声をかけている場合のみアルファベットで示している(B、C)。

動いている。

イ 全員の子どもの名前を呼ぶ

「おいで」「手を洗おう」と声をかけるのではなく、活動内容の前に名前を呼んでいる。表1には記載していないが、子どもは自分の名前を呼んでくれる保育者の方へ向かう姿がみられた。名前を呼ばれ、活動内容を伝えてもらうことで、自分がこれから何を行うのかを気づかせている。

「○○ちゃん行きます」「○○ちゃんおいで」などの言葉による子どもの様子は、表1には記載していないが、映像を見た際の子どもの表情や姿から、子どもに安心感を持たせ、集団の中でも一人一人を確実に見守っている姿勢がうかがえる。

ウ 子どもに掛ける言葉と、保育者同士伝え合う言葉の高低、スピードが異なる

子どもに掛ける言葉は、しっかり顔をあげ、子どもの方を向き、少し高めの声で呼ぶ。話すときはゆっくり、繰り返しやおトマトペが多い。しかし、「おむつが濡れていたか」「トイレで排泄できたか」など保育者AとBとの会話の中に頻繁に出てくる言葉は、子どもに声掛けする言葉とは違い、早口で少し声が低く、時には聞き取れないほど小声である。同じ保育者に声をかけるときでも、保育者A、あるいはBが「○○ちゃん行きます」と次に子どもが行くところの保育者へ声をかけている時は、大きな明るい声である。

子どもに対する言葉と保育者同士の言葉、特に子どもに聞かせなくてもよいこと、知らせた方がよいことの区別がなされている。

エ 保育者のイレギュラーな動きは大きな声で知らせる

「消毒借ります」と言う保育者Cの言葉は、本来消毒の担当ではないが、子どもとのかかわりの中で、気が付いて消毒を取りに行く。担当者間であらかじめ役割分担をしておいたこととは異なる事態に遭遇した場合やイレギュラーな対応が求められる場合に、気が付いた保育者が、他の保育者の知らないうちに行うのではなく、声に出してから行動する。

「声に出して行動をアピールする」ことは、手の消毒のように、同じことを、子どもの人数分行わなければならない時など、重複したり、一方、抜けてしまったりすることを無くすためにも、重要なポイントといえる。

(2) 3分～8分

1) 保育者の支援の実態

保育者A おやつを食べ終わった子どもへの対応等、フリーに動く。

保育者B トイレの中で、子どもたちが排泄をする援助のほか着脱の補助を行う。

保育者C 保育室で排泄が終わった子から、帽子をかぶる援助を行い、子どもたちと一緒に手遊びをする。

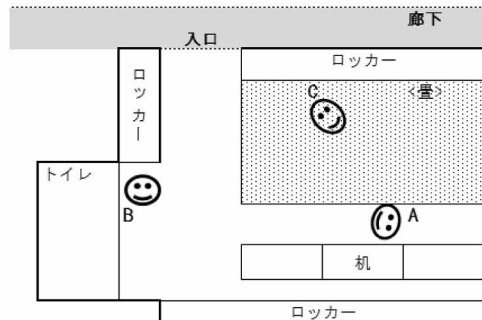


図2 保育者の向き_2

2) 結果と考察

ア 活動の進行によって保育者が移動する

主になって保育を進めている保育者Cは、消毒を済ませた子どもが多くなってきたので、体の位置を少しずらし、たくさんの子どもの方を向いて、手遊びをしている。保育者Aはトイレの前から動き、おやつ、帽子の手助けをし、保育者Cのフォローをしている。子どもの動きによって保育者も必要な場所に動く。二人が同時に時計を見るシーンがあったが、子どもの動き、保育者の動き、時間の経過など様々なことを考え保育していることがよくわかる。後半になると、トイレには2～3人ほどしかおらず、保育者Bは手洗い、消毒、そしてマットを片づけたりしている。表2には記載していないが、映像からは、保育者はどこへ動くということは声に出してはいないが、動作や目で合図しながら、動いている様子がみられた。

イ 3人の保育者が一緒にリズムをとっている

主担当である保育者Cが、手遊びを始めると保育者AとBは、子どもの着脱等の手助けをしながらも、一緒に歌ったり、体でリズムをとったりする。保育者3人は子どもに対してのかかわりは異なっているが、クラス全体での活動をしようとする際、保育者の声やリズムに合わせて歌ったり、体を揺らしたりしている。

表2 保育者の支援の様子__2

	保育者A	保育者B	保育者C
	トイレの前で座り、それぞれのおむつ等を用意し着脱の補助		子どもたちを座らせ、手遊び
時間	子ども・排泄10人、畳で手遊び6人、おやつ1人		
3分	(時計を見る)	(時計を見る)	(手遊びをしながら、前にいる子どもと、ほかの子どもたちを目で追う)
	(着脱している子どもたちも一緒に手遊びのリズムをとっている)	もらっておいで	ニシンのひらきが……あれ4はなんだっけ
	帽子もらっておいで		シャケよく知ってたね シャケのひらきが……
	保育者A	保育者B	保育者C
	おやつを食べ終わった子どもの援助、帽子をかぶる、着脱等フリーに動く	トイレの前で座り、それぞれのおむつ等を用意し着脱の補助	手遊び、帽子
	子ども・手遊び13人、排泄2人、帽子2人		
4分		おいで	おいで
		お茶飲めたかな	クジラは大きいよ。クジラの……
		(おやつを食べ終わった子のそばに行き、食器を片づける)	もう一回やろっか
	口拭いといてね		もちもちしてから、ここにかけるんだよ (帽子のかぶり方)
		できたねーすごい	もう一回やる？
		〇ちゃんいくよ	上手にかぶれたね
	しゅしゅできたね	手洗って	
		ちゃんと消毒してください	もう一回やろかね
	(一緒に体を動かす)	ずんずんちゃちゃ (ずぼんはかせながら)	1はなんの魚だったかね
		パンツはいて	いわしのひらき……
	Dくん、先生拭いてあげるから待ってて	Dくん帽子くださいって	まだかなあ
	待っててね		〇ちゃん 〇ちゃん
6分	顔と手を拭く	大丈夫よ	〇ちゃんの帽子、一緒に探そ。帽子どれだ どこもちもちするんだった
	帽子をかぶせる		お背中べったんしていて(壁に背中をくっつけるようにして座らせる)
		〇さん濡れていました	空いていたから大丈夫(子どもがたくさんになってきて空いた場所を探している)
		はんぶっこしよう(敷物をたたむ)	
	Dくんおしっこ行ってきたら		パンつくろかな アンパン食パン、アンパン食パン……
8分			上手だったね、パンつくるの

【注】

- ・()内の言葉は、保育者の言葉ではなく、保育者の動きや保育室での状況を説明するために筆者が付け加えたものである。
- ・保育者間で何度も同じ子どもに声をかけている場合のみアルファベットで示している(D)。

特に手遊びは同調性を導き出すものであり、主担当である保育者Cの歌に同調し体を動かしたり、歌を歌ったりすることが、子どもたちにも伝わり、まとまった空間づくりになっている。

ウ 個々の子どもにあった対応をする

最後までおやつを食べていたDに対して、保育者AとBが声をかけながら見守っている。乳児保育の中で一人一人を見ていくときに、発達の個人差や本人を取り巻く環境の個人差など様々な要因を考慮しなくてはならない。研究協力者とのビデオ映像確認時には、Dはなかなか集団の保育になじまず、保育者もその点を考慮しながら保育をしている様子が伝えられた。表にはDの表情の記載はないが、映像からは、Dへ声をかけても、なかなか笑顔を見せないでいたが、保育者A、Bのかかわりとともに、次第に笑顔もみられるようになった。

(3) 8分～13分

1) 保育者の支援の実態

保育者A おやつを食べ終わった子への対応と、帽子をかぶる援助を行う。

保育者B 着脱の補助をする。

保育者C 子どもたちと一緒に手遊びをする。

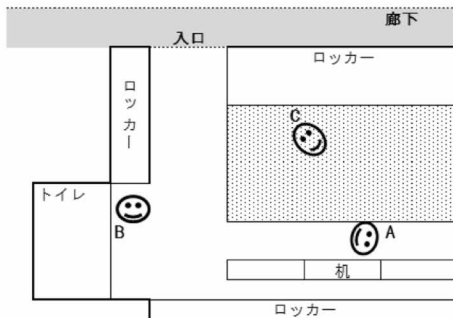


図3 保育者の向き__3

2) 結果と考察

ア 最後に残ってしまった子どもに対して、あわてさせず、3人の保育者が声をかける

最後まで残ったのはDとCである。どちらにも3人の保育者が声をかけながら、子どもたちの気持ちに添っている。特にDは最後にトイレに行き、手を洗い保育者Bに消毒をしてもらう。その際、保育者Bは、にこにこ顔でDの顔を見つめながら、消毒をDの手にかけ、保育者の両手で揉みこむようにさすって

いる。表3に記載はないが、映像からは、Dはにこにこし、帽子を取りに行く様子がみられる。Cに対しても、帽子を取りに行くことが最後であったが、保育者Cは「Cくんの帽子どれだ」「Cくんの帽子どれだ」と焦らすことなくCに対応している。

その時々で子どもの気持ちは変化する。保育者がそれぞれ子どもに寄り添うことの大切さがわかる。

イ 順番の列に遅れても、楽しさを感じさせる

並んで子どもたちが歩き出す。集団であるため、早い子もいれば遅くなる子もいる。一番前に主となる保育者C、真ん中に保育者A、そして最後に保育者Bがつく。保育者Bは、遅くなった子どもと手をつなぎ、大きな声で歌を歌いながら歩き始める。最後になった子どもたちは一緒に歌いながら、前にいる子どもたちも、後ろから聞こえてくる歌声に、自然にリズムをとっている。クラスの一体感を感じる。保育者は、その場に応じて、子どもたちの気持ちを量りながら保育を行っている様子がうかがえる。

VI 総合考察

1. 個へのかかわり

本事例では、子どもの名前をとにかくよく呼んでいる。ほんの3分間ではあるが、どの保育者も子どもを呼ぶときに必ず、名前で呼んでいる。大方(2013)は、「子どもの名前を呼ぶことの大切さ」として「低年齢児保育では、特に、子どもの名前を呼ぶことが大切である。」「ばくって、わたしって」という自己形成は、自分の名前を知るところから始まる。自己肯定観は、自己の存在から始まる。一日一回でも子ども一人ひとりの名前を呼ぶことは、低年齢児保育における生命への畏敬の念であり、人間への尊敬である。」²⁾とある。同時に、名前を呼ぶ行為は、保育者との信頼感を強めることが可能となる。

幼い子どもを家庭で育てる際、保護者は子どもの名前を1日何回呼ぶであろうか。家庭であれば、名前を呼ばなくても誰をさしているのかわかるはずなのに、顔を見れば名前を呼ぶ。数えきれないくらいである。そうであれば、保育所という集団生活の場であるからこそ、また、「自分」を作っていく時だからこそ、名前を呼ぶことが必要である。おやつを遅くまで食べていて、つまらなそうな顔をしていた子に、保育者がやさしく手を握り「Dくん」という声をかけた途端に笑顔を浮かべたシーンがあったが、Dにとって認められたという気持ちが現れた瞬間であったと推測できる。乳児保育は、個へのかかわりの重要性がいわれて

表3 保育者の支援の様子__3

	保育者A	保育者B	保育者C
	おやつを食べ終わった子どもの援助、 帽子をかぶる、着脱等 フリーに動く	トイレの前に座り、着脱の補助・片づけ	手遊び
時間	子ども:手遊び13人、排泄2人、帽子2人		
8分		Dくんおしっこ すわーって	大きいのつくってあげようか らいおん、ぞうさん、きりんさん、どれがいい？ きりんさんにしようか
	Cくん さあそろそろいいかな、 Cくん手洗える？		アンパン食パン、アンパン食パン……
		おいで Cくんおしっこ	Cくんの帽子どれだ 上手だね
	Dくん帽子上手		散歩に行ったら時ながいた？どんな虫さんい た？ありさんいたよね
	そうだね		アリさんにもパンつくつたげようか。ちいさいぱ んつくろうか
	Dくんおいで 手洗っておいで		ちょっと待っててねCくん Cくんのどれだ Cくんのどれだ
		消毒・よかったねえDくん(手を持って) お帽子くださいって	それじゃお外にいけるかなあ、みんな それじゃね あっ〇〇くん上手
	Dくんおいでどうぞ 帽子をかぶるの上手 上手だから、おやつも早く食べようね	上手だね	Dくん
	保育者A	保育者B	保育者C
	保育者Cのサポート		散歩の準備
	子ども:散歩の準備17人		
11分			外今から行くけど、靴はく前に何するんだった？ くつ下だったね 靴の中から出して はいてから、靴はくんだよね はけたら先生に見せてね
			あっているかなあって見て、しっかり先生ベル トしてあげるから みんなと一緒にいくからね
	ごめん Oくんころんじやった		はい、上手、上手、じゅんぱんこ (手を取ってみんなつながる) くねくねすると、お友達ころんじやうでしょう
		歩こう、歩こう(歌いながら遅れている子と 手をつないで)	
13分		しゅしゅ、しゅしゅしゅ、しゅぼっぼ(歌いな がら)	

【注】

- ・()内の言葉は、保育者の言葉ではなく、保育者の動きや保育室での状況を説明するために筆者が付け加えたものである。
- ・保育者間で何度も同じ子どもに声をかけている場合のみアルファベットで示している(C、D)。

いるが、集団での保育という制約の中にあっても、名前を呼ぶという一つの行為によって、個へのかかわりが丁寧になされていることがわかる。

2. 保育の共有

保育者の声の変化、トーンの変化がよく見られる。子どもに特に知らせなくてもよいことは小さな声で伝え合う、また知らせなければならないことに対しては、大きな声、かつ少し高めの声で知らせる。保育者同士の会話の中でも目的によって使い分けているのである。このことは、保育の中でとても重要なことであり、誰に向けて、どのような内容の言葉なのかははっきりわかり、保育者間で保育を共有できているため、その日の保育をスムーズにしていることをうかがうことができた。この場合の保育の共有とは、単に役割分担や保育のねらいを把握しているということではなく、その時々保育の流れや子どもの様子、子どもの動き、保育者が今、行っていることを互いに把握し、場を共有し、雰囲気共有していることも意味している。

複数担任制の中で最も大切にしていることについて保育者に尋ねた場合、「連携」、次いで「共通理解」という言葉が多くあがる³⁾。「連携」の意味は、大辞林(第三版)によると、「連絡提携の意味で、連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をする事」⁴⁾である。まさに、2歳児クラスの保育は、一つの目的、つまり、クラスの子どもの健全育成のために複数の保育者が、一緒に保育を行っている姿そのものである。そして、そのために、子どもへのかかわり方、保育の進め方などについて、担当者が共通して理解している事が大切であるといえる。

3. 担当保育者の構成

保育者Aと保育者Bは自身の子育ての経験もあり、園での保育者歴も15年以上のベテランである。クラスの保育の中心的役割を担っていたのは、保育者Cであり、保育者歴2年である。乳児の保育を考えると、特に年齢が低ければ低いほど、養護面での配慮事項が多く、子どもの命が保育者に委ねられているといっても過言ではない。経験が浅い保育者だけの保育では、細やかな保育は難しいといえる。そのような中、本事例は、ベテラン2名が補助的役割を担当し、経験の浅い保育者が保育の主体となり、ベテランの保育者の動きや言葉を見聞きしながら、経験を積んでいくことが可能な体制となっている。ベテラン保育者は、子どもの保育とともに、経験の浅い保育者を育てるため

に、モデルとなる保育をすることも大切な役割となる。保育者不足や早期離職が課題となっている今の保育現場だからこそ、このようなベテラン保育者が、経験をつないでいくことが必要である。

VII おわりに

「連携」つまり、「連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をする事」という意味をもう一度考えると「子どもの最善の利益」のために、「子どもが主体」でなくてはならない。本事例で3人の保育者の姿を追うと、それぞれの保育者が自身の役割を理解し、一人一人の名前をしっかりと呼び、子どもたちに必要な声と、職員同士の声を区別し、子どもたちの動きに合わせて、保育者が動いていることがわかった。まさに、「子ども主体」の保育であるといえる。

年齢が低いほど「特定の保育者」が望ましいかもしれない。「1対1」でなくてはという声もある。2歳児の保育を考えると、実際の現場で、長時間、保育所で生活する子どもたちにとって、2～3人の担当保育者の中で、日常的にあちこちから声が聞こえ、普段は、お気に入りの保育者にかかわりを求めるが、子どもの気分によっては別の保育者とかかわりを求める。そのような環境の中で、子どもがのびのび育つのはどうだろうか。家庭での保育(育児)と同じことはできない。だからこそ、専門性を持ったプロの集まりが、集団ならではの複数担任制を生かした保育を行う必要があるのではないだろうか。

保育所等利用率は年々上昇しているが、特に1・2歳児の利用率は、平成22年の29.5%から平成29年の49.5%と大きく上昇傾向にあり、待機児童も全体の71.7%を占めている⁵⁾。このように、1・2歳児の保育ニーズが拡大するなか、待機児童の解消とともに、保育の質が大きな問題となっていく。

2歳児であれば、保育者1人に対し、子ども概ね6人との基準があるが、子どもが12人だから保育者2人という数字だけのことでなく、複数担任であることが子どもにとってプラスになるように、保育を豊かなものにしていくことが望まれる。本事例Dのように、保育者AとBそれぞれが、それぞれの経験と役割でDに関わっている。そして、保育者CもDの名前を呼び、声をかける。Dの気持ちや表情は、この保育者の個へのかかわりの積み重ねを通してほぐれていく様子がうかがえた。少子化、核家族化という社会状況の中で、人とかかわりが希薄になってきたといわれる現代だからこそ、家庭での保育(育児)ではで

きない、複数の大人との交流を重視する必要があるだろう。まずは、保育室に複数の大人がいて、声が聞こえる、誰かいる、というだけでよいのかもしれない。3歳児以降になると、担任保育者の数は減っていく。子どもの育ちからも、大人との関係性より子ども同士の関係性を重要視していくからである。しかし、その過程では、保育所生活での身近な大人との関係性をどのように築いてきたのか、どのように保育者が関わってきたのか、その後の子どもの成長に大きく作用する。子どもの育ちの見通しをもちつつ、複数担任のあり方をも考える必要があるといえる。

注

- 1) 厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ(平成29年4月1日)」(<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000176121.pdf>, 2017.11.27)
- 2) 大方美香「第3章 環境が及ぼす低年齢児の育ち」、『保育所における低年齢児の保育に関する調査研究報告書』, 社会福祉法人日本保育協会, 2013, P. 18
- 3) 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之「保育所保育における複数担任制の利点と問題点」、『岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号別冊』, 2015, PP. 44, 45
- 4) 「大辞林(第三版)」, 三省堂, 2006
- 5) 再掲: 1)

参考文献

- ・山本佳子(2015)「乳児保育における「緩やかな担当制」に潰えの提言」『中国学園紀要 14号』177-184
- ・吉田龍宏・渡辺桜 著, 小川博久監修(2014)『子どもも保育者も笑顔になる! 遊び保育のための実践ワーク』萌文書林
- ・大方美香・小寺玲音・玉置哲淳(2012)「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討—乳児保育研究その1—」『大坂総合保育大学紀要第7号』67-94
- ・日本保育協会(2008)『保育所における低年齢児の保育に関する調査報告書 平成19年度』社会福祉法人日本保育協会
- ・八東美樹・安田智美・田澤賢次・高間静子(2002)「基本的生活習慣の自立家庭の発達への影響要因に関する文献的考察」『富山医科薬科大学学会誌第4巻2号』15-20

